



# やさしくつながる

Vol.4

2026.02

「大事なことを伝えたい」

奨学生と保護者の作文コンクール

特集



**奨** 学生と保護者の作文コンクール「大事なことを伝えたい」を初開催しました。昨年度まで新潟県奨学金ネットワークが主催し、当財団の奨学生が「私の夢」を語る「成果報告会」を開催していましたが、この「成果報告会」に代わるものとして、当財団の高校奨学生全員を対象に作文コンクールを実施しました。また、奨学生だけでなく保護者からも様々な想いを、発表してもら

場を提供することとして企画しました。作文の内容からは、苦しい生活状況がうかがわれるものの、将来の展望を切り開いていこうとする高校生や保護者の気持ちが伝わってきて、思わず胸が熱くなるような作品もいくつかありましたので、みなさんに紹介していきます。

## 奨学生と保護者の作文コンクール

# 「大事なことを伝えたい」

作文コンクールのメインテーマは「大事なことを伝えたい」としました。その上で募集に当たっては、少しでも作文が書きやすいようにとあらかじめ「奨学生の部」、「保護者の部」ともに4つのテーマを提示し、その中から選んでもらうこととしました。※テーマ以外の応募も可能としました。

「奨学生の部」作文テーマ **私が未来に伝えたいこと / 10年後の私 / 私が選んだ道 / あの日、変わった私**

「保護者の部」作文テーマ **高校生活を通して見えた子供の成長 / 親としてやってきたこと、もっとやりたかったこと / 将来の期待と社会に望むこと / 子どもに学んだこと**

応募結果

- 奨学生の部 53作品
- 保護者の部 54作品

選考結果

- 奨学生の部 最優秀賞1作品 優秀賞5作品 佳作12作品
- 保護者の部 最優秀賞1作品 優秀賞3作品 佳作6作品

### 受賞作品

紙面の都合で最優秀賞のほか、優秀賞の中から3作品を紹介します。……………



奨学生の部

### あの日、変わった私

私には夢があります。それは、「薬の研究者になること」です。  
私は幼少期から中学生まで「膝が急に激しく痛む」という病気がありました。保育園児の私にとってその痛みは、夜も眠れなくなるほどで、毎日のように夜泣いていました。病院に行っても、言われるのは「原因不明」の一言で、「どうしたら治るのか。」ということだけを毎日考えていたような気がします。決まって夜、寝る直前だけ現れるその症状に寝ようとするのが怖かったです。  
そんなある日、私は一錠の薬を処方されました。名前は、「カロナール。」初めて飲んだ薬は、驚くほど私の痛みを癒しました。夕食後の一錠で次の日の朝まで痛みで目が覚めることがない。嬉しくて、痛む度に服用しました。その時から、私は漠然と薬剤師になることを夢見るようになりました。  
しかし、当時の私は知りませんでしたが、人の身体は薬に対して耐性ができます。毎日のように薬を飲んだ結果、次第に用量を増や

しても効かなくなったのです。それから様々な薬を処方してもらい飲むうちに、痛みは引いていきました。今では月に一度、痛む程度です。  
今、この場に立って過去を振り返ると、私は常に薬に助けられていると感じます。それと同時に、薬が効いていないと察した瞬間の絶望もはっきりと感じます。そして、きっと世界にはどの薬も効かずに苦しむ人がいるのだ、と考えるようになりました。過去にぼんやりと薬剤師になりたかった私の夢は、「薬の研究者になる」という形で、はっきりと目の前にあります。  
薬の研究者という仕事はとても難しく、一筋縄ではいかないと思います。過去の私が薬に救われたように、世界のどこかにいる誰かが笑顔になれるように。幼少期から思い描く夢の実現のために、一步一步、全力で、前に向かって進んでいきます。



保護者の部

### 親としてやってきこと、もっとやりたかったこと

娘は先天性の障がい生まれ、2歳8か月までNICU(新生児集中治療室)で育ちました。  
私の子育ての始まりは、器械につながれ眠る娘のかたわらで、ひとりごとのように話しかけることでした。子どもの成長で一番かわいい時期を味わうこともなく、NICUという特殊な環境で一日を過ごす、それが私の日常でした。  
娘は、弟が生まれるのを機に在宅になり、私は新生児の子育てと障がいのある子の介護を同時に始めることになりました。産後にも関わらず、息つく間もない忙しさに、うつになりかけたこともありましたが、子どもたちと一緒にいられる喜びを、身をもって感じて幸せでした。それから2年後に離婚し、ひとりですべてを育ててきました。  
経済的に余裕のない生活の中でも、できることは精一杯やってきました。お金をかけずにできること。それは、『一緒にいること』『話をきいてあげること』です。この2つだけは、頑張ってきました。疲れ

ているときも、忙しいときも、「親は私一人しかいない」と自分に言い聞かせ、よばれたら必ず手を止めて子どもに寄り添ってきました。  
現在、障がいがある娘は18歳、息子は15歳。息子は思春期真っ只中で、普段親の話など聞こうとしませんが、ときおり話したいことがあると、しつこく追いかけてきます。知的障がいがある娘は、いつでもどこでも「おかあーさん」と呼んでくれます。小さい頃のように、べったりと一緒にいることがなくなっても、子どもたちに求められたときには、いつだって手をとめて話をきく、私が親としてできることは、昔も今も変わっていません。  
自分なりに頑張ってきたとはいえ、もっとできたのではないかと思う気持ちは、親ならだれでも抱くと思います。少しでも「もっとやりたかった」と後悔しないよう、自分が信じてきたことを、この先も続けていきたいと思っています。





奨学生の部

## 私が未来に伝えたいこと



私が、未来に伝えたいことは、「困った時苦しい時は、迷わず大人に頼ること」である。

私は、中学2年生の時に不登校を経験しており、学校に行きたくても行けない葛藤や、両親とぶつかり合いを経て、高校に進学をするという道を選んだ。この選択を選ぶにきっかけをくれたのは、スクールソーシャルワーカーのTさんとの出会いである。当時学校に行けない私に考慮して担任の先生が別室登校を提案してくれた際に紹介してくれた人である。

Tさんは私に、何かを強要するでもなく、ただ私に寄り添って、私の話に耳を傾けてくれた。次第に私も自分の事を話せるようになった。

両親にも自分の気持ちを伝えて、一人で苦しんでいたこと、自分の今後などを話すことができた。そして、約一年間の別室登校を通して中学3年生から再び教室登校に戻ることができ、高校にも進学できたのである。

以上の経験から、私は困っている時、自分が苦しい時には一人で悩まず大人を頼っていいのだということを学んだ。自分の気持ちを伝えれば聞いてくれる。新しい可能性を示してくれる。一人で何でも抱え込むのではなく、沢山のひとと会話を通して、自分も成長できたのだと思った。



奨学生の部

## 10年後の私



中学校生活最後の年。友達との日常や学校行事を楽しみながら、高校受験に向けて机とらめっこしていた15歳の私。そんな濃い一年をつくり上げてくださった先生がいました。

中学三年生の担任の先生は、熱い気持ちと温かい心で生徒を包みこんでくれるお母さんのような優しい方でした。生徒一人一人に対して「おはよう!」と毎朝声をかけてくれ、いつでも話を親身に聞いてくれる大好きな先生です。いつしか私も「こんな中学校教師になりたい!」と思うようになりました。

元々小さい子と関わったり、教えたりすることが好きで小学校教師に憧れていたけれど、人間関係や受験勉強で悩んでいた私を支えてくださった中学校の先生の存在が大きき感じになりました。また、幼い頃から母が英語にふれさせてくれ、英語が好きだった為専門教科を教えることができる中学校教師が魅力的でした。そして

生徒と共に学校行事を通じて青春を過ごしたいと思いました。

今、夢の実現に向けて努力したいことが主に二つあります。

一つ目は英語力の向上です。文法をマスターする他、日常的に英語を活用できるよう、会話力も上げていきたいです。私自身の英語が好きという気持ちを大切に、生徒に英語の魅力が伝わる楽しい授業を提供したいです。

二つ目は人間力の向上です。生徒、保護者や先生方の信頼を得るため、常に柔軟に対応していけるよう人間性を磨き、思春期の子ども達からも安心して相談してもらえる良い雰囲気を作りたいです。

大好きな先生との出会い、数多くの経験の機会を与えてくれた英語を好きにさせてくれた家族、そして将来に向けて応援してくださる方々への感謝の気持ちを心にやどして一步一步前向きに取り組んでいきます。いつか尊敬する先生を超える最強の先生になりたいです。



保護者の部

## 高校生活を通して見えた子供の成長



4月に高校に入学した娘は、念願だった高校に入学し、希望どおりに吹奏楽部に入部し喜びに満ち溢れた表情で、夢中で日々を過ごしているように見えました。ひとり親で何かと日々の生活や仕事に追われながらも、そんな娘を応援して支えるのが生きがいと感じていました。

ある日、夕食の後に今日あった事などを話してくれている時でした。部活やクラスメイトと、意見の相違があった事を話してくれたことがありました。以前から、ちょっとした愚痴を話すことはありましたが、批判や自己嫌悪に陥る事が多かった様に感じていましたが、今は相手の考えも受け入れ「他」を尊重することを覚えた様に感じ驚きました。相手が何の為に、その言葉を発したか?そういう考えに至ったのはなぜなのか?より良い結果に、関係性になるためには自分はこうしたらいいのか?自分でも考え、相手とも話し合う。ということができるようになっていました。

自分の気持ちだけで物事を考えないという事は大きな成長だな

と驚きました。私自身も娘を慰めたり、助言をするよりも、私に話す事で自分自身で考えを整理する娘の聞き役に徹するように変わったように感じています。

部活動を通して、先輩や先生から礼儀を教わり、自然に感謝できる事ができるようになっており嬉しく感じています。技術の向上や、コンクールへ向けての努力を惜しまず、沢山の人の笑顔にできる音楽をしたいという夢にむかっている娘の一番のファンは私だと思っています。

また、入学してすぐに進級後の進路の話や、さらに卒業後の進路のお話があり、友人との学校生活、部活動を曇りなく充実させる為に成績や進路の目標を持ち、勉強にも意欲をみせてきています。人の意見に流されず、涙を流しながら迷い悩んでいる姿に成長の過程をみました。

素直に、ひたむきに成長していく娘をこれからも応援していきたいと思いますし、娘の成長がとても楽しみです。

## 選考委員の皆さんから、選考を終えてのコメントをいただきました



新潟県立大学  
人間生活学部 教授  
小池 由佳

このコンクールの特徴は、子どもだけでなく保護者の方からも応募していただいた点にあります。子どもたちの作文には、自分の夢を実現し、それを通じて、他者や社会をよりよくしていきたいという願いが詰まっていました。奨学金があることは、子どもたちの夢を形にする一助となっていることが窺えました。同時に、保護者の応募作品には、子どもと真摯に向き合って来られた姿が数多く見られました。子どもに何を伝えてきたのか、子どもや家族が直面した困難をどのように一緒に乗り越えてきたのか、あるいは子どもの姿から自身も新たな一歩を踏み出した経験。いずれにおいても、子どもから目をそらさず向き合う姿勢がありました。このことが、子どもが夢を持つことの後押しになり、財団の奨学金がその実現への支えになっていることが感じられました。最後になりますが、ご応募くださったみなさま、ありがとうございました。



新潟県教職員組合  
執行委員長  
今井 淳

今回審査にあたり、お一人お一人の作文を何度も読ませていただきました。子どもたちの作文からは将来への思いや周囲への感謝が、保護者の作文からはお子さんへの愛情とともにお子さんと成長する姿を感じました。内容に優劣をつけることは難しく、それぞれが真剣に考えた文章、その全てに心が動かされました。非常に悩みながら審査をさせていただきました。作文を全て読ませていただき印象に残ったのは、「支え合う親子の姿」です。子どもたちは夢に向かって学びを進めていく、それを保護者が支える。そうした親子の素晴らしい関係性を感じました。一方、支え合うことは美しいことではありますが、「親子が支え合わなければならない」社会の状況についても考えさせられました。個人の生活を「自己責任」とするのではなく、様々な事情を抱える方々が社会の中で孤立しないよう、セーフティーネットをより一層機能させていくことが重要であると思います。誰もが望む学びや生活が保障される、そうした社会になることを切に望みます。



新潟県高等学校長協会  
事務局長  
関矢 和彦

選考を終えてみて、応募作品の中に力作がたくさんありました。奨学生の部では、自らの体験を通して自分の将来像を描き、その目標へ向かって努力を続けていくという強い決意と意欲が感じられる作品が数多くありました。自分の殻に閉じこもるのではなく、様々なことにチャレンジしていくために、当財団の奨学金制度がとても大きな意義を持ち、その第一歩を踏み出すきっかけ作りにもなっていると感じました。保護者の部では、お子さんとの親密な関係性が読み取れる素晴らしいものが多かったのが印象に残りました。様々な環境の下で、明るい未来へ向けて親子で前向きに挑戦を続ける姿に深く胸を打たれました。日々の生活を通して、人はどんな時でも学びあい、助け合うことができる存在である、ということが作品の中からひしひしと感じられました。



ろうきん福祉財団  
理事長  
山崎 雅彦

奨学生の作文を評価者のひとりとして読ませていただきました。役割上、点数は一定の基準の中で付けさせていただきましたが、奨学生、そして親御さんたちが紡いでくれた想いに優劣は無く、それを読ませていただいたことは、私にとって本当に貴重な時間となりました。印象に残ったことは、ひとり一人、それぞれのストーリーがあること。高校奨学生の取り組みは収入額を基準にしたものですが、そこに至る背景や事情は様々。語られる状況の厳しさ、苦しさ胸を締め付けられることもありましたが、筆力には差はあるものの、奨学生の皆さんが各々の体験から気付きを得て、視野を広げながら成長する姿や、将来の夢を描き、実現に向かって歩みを進める姿が素直に伝わってきました。これからも今の気持ちを忘れず、前に進んで欲しいと思います。そして、それを支える親御さんの頑張り。心に響きました。高校奨学生の取り組みが、多感で吸収力旺盛な学生たちの学びを、微力でもサポートできればと思います。今回は作文コンクールに参加いただきありがとうございました。

## 奨学生と保護者の作文コンクールを開催して

募集期間は10月10日～11月10日までの1か月間。募集開始後さっそく5件の申し込みがあり、「幸先いいぞ!!」と意気込んだものの、その後はパタッと申し込みがなくなり、「大丈夫かな?」と不安に…でも、11月に入ると次から次へと作文が届き、気づけば奨学生の部、保護者の部あわせて107作品の応募があり、事務局としては、ほっと胸をなでおろす結果となりました。

応募作品は力作ぞろい、選考は難航。選考については、選考委員会で審議してもらうこととしました。ただし、事務局で一定程度採点した中で佳作以上の作文を選定し、選考委員会で優秀賞と最優秀賞を審議してもらうこととしました。当初は事務局での一次選考で、もう少し作品を絞りたいのですが、どの応募作品も力作だということもあり、結果として、奨学生18作

品、保護者10作品を選考委員に最終選考を委ねることに。最終選考では選考委員から、なかなか甲乙つけがたいという意見もありましたが、奨学生の部、最優秀賞1作品、優秀賞5作品および保護者の部、最優秀賞1作品、優秀賞3作品を選んでもらいました。残りは佳作とさせて頂きました。受賞作品の一つひとつには、奨学生の皆さんの真摯な学びの姿勢や、それを支える保護者の皆さまの温かな思いが込められており、事務局として大きな励みとなりました。多くの力作をお寄せいただいた奨学生の皆さん、そして保護者の皆さまに、心より御礼申し上げます。



## 事務所移転のお知らせ

日頃より当財団の事業に格別のご配慮を賜り、誠にありがとうございます。この度、当財団は事務局を右記に移転することになりましたのでお知らせいたします。これを機に役員一同、皆さまのご期待に添えますよう一層努力してまいりますので、今後とも変わらぬご支援とご指導を賜りますようお願い申し上げます。

移転先

〒951-8113  
新潟市中央区寄居町332-38 新潟県労働金庫本店5階  
TEL:025-288-5273(変更なし) FAX:025-288-5274(変更なし)

移転日

2026年  
2月13日(金) 新事務所での業務開始日 2026年  
2月16日(月)

